

— 小児看護専門看護師の役割と活動 —

私は小児看護専門看護師として本院で勤務しています。私が小児看護専門看護師を目指したきっかけは、脳腫瘍で闘病していた思春期の子どもからのある言葉でした。その子どもは気管切開をしており発語が難しく終末期で意識レベルも低下してきている中で、私の掌に指で「ぼ」「く」「し」「ぬ」「の」と一文字ずつ書きました。当時看護師3、4年目の私は、その子どもと家族を目の前にどう反応したらよいか分かりませんでした。子どもなりに勇気を振り絞って表出してくれた思いに対して誠意をもって向き合えなかったことへの申し訳なさや後悔が残りました。小児終末期看護を何例も経験する中で「子どもが置いてけぼりになっている気がする」「これでよいのか」「もっとできることがあるのではないか」と悩み葛藤も抱くようになり、終末期にある子どもと家族の気持ちや置かれている状況について理解を深めて根拠に基づくよりよい看護を実践したいと思い、



大学院へ進学しました。私が2018年に専門看護師の認定を受けた時、本院には小児看護専門看護師として活躍されている先輩がいたのでとても心強く、相談しながら活動し始めることができました。

小児看護領域は、新生児期～思春期の子どもの成長発達段階を踏まえて看護を提供する能力が必要でその子どもを取り巻く家族まで対象が幅広く、より専門的で高度な知識と技術が求められるといわれています。そのような中で小児看護専門看護師は、小児病棟・外来だけでなく集中管理が必要な子どもと家族の支援、子どもの家族として取り残されがちなきょうだいへの支援、成人病棟に入院する患者さんのお子さんへの支援などを組織横断的に行っています。また、小児看護プロジェクトを運営し「東京女子医科大学病院子ども憲章」を作成し、子どもの最善を考え子どもの権利が保障されるための指針として活用しています。さらに、本院・足立医療センター・八千代医療センター合同の小児看護継続教育として「3施設合同小児看護研修」を開催し小児看護の質の向上に努めています。当院は2023年度に小児がん連携病院に認定され、成人領域や他院とも連携を図り小児がんの子どもたちを支えていく役割も国から求められるようになりました。当院で治療ができる小児がんは脳腫瘍が主ですが、末期心不全や重症心身障害児など緩和ケアを必要とする子どもも多く存在します。今後は、多職種や成人緩和ケアチームとも協働し小児緩和ケアチームを立ち上げ、多角的視点で苦痛を評価・緩和してその子どもが子どもらしくその家族らしく1日1日を過ごせることを目指し、小児緩和ケア診療加算取得に向けても取り組んでいけるとよいなと考えています。

私は専門看護師認定後に出産を経験し幼い子ども2人を育てながら時短勤務で病棟の一員として働いているので、現在は自部署での実践が主になります。倫理的視点を大切に働いていますが、役割を広げようとすると勤務内ではどうしても時間が足りず自部署の複雑な事例にさえも手を出せないこともあり、仕事と家庭の両立が難しいなと感じることもあります。師長主任をはじめ部署のスタッフの協力も得て働き続けることができているのですが、やれることが限られる中で専門看護師としてどう活動するかも今後の自身の課題です。昨今、少子高齢化はますます進み出生数は減少する一方です。小児に携わる看護師として、これからも子どもの命の尊さを大切に、子どもの成長発達や権利を擁護する存在であり続けたいと思います。